

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Lymph node metastases from cutaneous squamous cell carcinoma of the head and neck	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-12, SCC-CQ10-5	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 (1 V)	
	Pubmed ID	16148695	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Laryngoscope	
	雑誌 ID		
	巻	115	
	号	9	
	ページ	1561-7	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Moore BA	MDアンダーソン癌センター
	その他著者 1	Weber RS	同上
	その他著者 2	Prieto V	同上
	その他著者 3	El-Naggar A	同上
	その他著者 4	Holsinger FC	同上
	その他著者 5	Zhou X	同上
	その他著者 6	Lee JJ	同上
	その他著者 7	Lippman S	同上
	その他著者 8	Clayman GL	同上
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	皮膚原発扁平上皮癌で領域リンパ節転移を来した症例の予後を検討する。	
	研究デザイン	コホート研究 (前向き試験のサブセット解析)	
	セッティング	MDアンダーソン癌センター	
	対象者	臨床試験に登録された 210 例のうち頭頸部原発例が 193 例 リンパ節転移陽性: 40 例、陰性: 153 例 部位: 耳下腺部(12 例)、顔面(9)、頬(5)、鼻(5)、頭皮(3)、頸部(3)、 下口唇(2)、上口唇(1)	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)	
	介入 (要因曝露)	原発巣切除+頸部郭清+放射線療法: 19 例 原発巣切除+放射線療法: 10 例 原発巣切除のみ: 4 例 原発巣切除+頸部郭清: 3 例 放射線療法単独: 2 例	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	領域リンパ節転移は予後 (不良) に強く相関していた。 尿管侵襲、低分化型、皮下組織への浸潤、周囲神経への浸潤、大きな腫瘍は予後不良。 手術+放射線療法は領域リンパ節の制御は 95%と良好であるが、局所および遠隔転移が多い。		
結論	上記のような予後不良因子を有する症例では手術+放射線療法が必要であろうが、さらなる成績の向上のためには新たなアプローチが必要。		

	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	レベル 1 V

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Cutaneous squamous-cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	SCC-CQ9-1, WEB-CQ9-1, SCC-CQ10-1	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( I )	
	Pubmed ID	11274625	
	医中誌 ID		
	雑誌名	N Engl J Med	
	雑誌 ID		
	巻	344	
	号	13	
	ページ	975-83	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Alam, M	コロンビア大学
	その他著者 1	Ratner, D	Columbia-Prebyterian Medical Center
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	皮膚扁平上皮癌の疫学、診断、治療法をレビューする
	データソース	記載なし
	研究の選択	記載なし
	データ抽出	記載なし
	主な結果	発生に寄与する危険因子: Table 1 参照 臨床所見: 扁平上皮癌は頭頸部領域から最も発生しやすかった。Keratoacanthoma は増殖スピードが遅かった (病理学的鑑別は時に困難)。Verrucous carcinoma はまれな扁平上皮癌で、切除で通常は治癒した。 再発の危険因子: Table 2 参照 腫瘍径、免疫抑制、既往治療、深部浸潤(>4mm)、低分化型、神経浸潤など 治療法: 切除、electrodesiccation、cryosurgery などで 90%以上が治癒した。低リスクであれば再発率は 5-8%程度。高リスクでは 15-25%に達した。 放射線療法: 手術に不適応の症例などに行われ、分割照射を行う。他の治療法との組み合わせで行われることが多い。高リスク群では術後放射線療法が考慮される。リンパ節転移例では手術、放射線、手術+放射線などが行われ、約 30-40%が治癒するにとどまった。
	結論	皮膚扁平上皮癌は概ね良好な成績であるが、一部の症例で再発や転移が見られ、その予後は不良である。十分な問診と全身の皮膚の観察が重要である。皮膚癌はある程度予防可能な疾患である。日焼けを避けるなどして命に関わる重篤な病態を作らないよう喚起を促す必要がある。
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	皮膚扁平上皮癌の疫学、診断、治療法までをレビューしている。一読の価値あり。厳密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討されており、それに準ずるものと評価した。 レベル I

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Metastatic cutaneous squamous cell carcinoma of the head and neck region	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	SCC-CQ10-2	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( I V )	
	Pubmed ID	8583845	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Laryngoscope	
	雑誌 ID		
	巻	106	
	号		
	ページ	156-8	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1996 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Tavin E	ニューヨーク大学
	その他著者 1	Persky M	ニューヨーク大学 medical center
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			
一次研究の8項目	目的	領域リンパ節転移を起こした頭頸部原発扁平上皮癌の臨床像を明らかにする。	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	

セッティング	ニューヨーク大学 medical center	
対象者	領域リンパ節転移を起こした頭頸部原発扁平上皮癌: 37 例 初診時にリンパ節転移あり: 7 例、残りの症例は後発リンパ節転移部位: 頰(9 例)、側頭部(7)、耳(6)、頭皮(6)、前頭部(4)、鼻(4)、眼瞼(1) 転移: 頸部(23 例)、耳下腺(16)、肺(5)、骨(2)、他	
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)	
介入 (要因曝露)	手術: 13 例、手術+放射線療法: 16 例、放射線療法: 2 例	
アウトカム (7項目)	エンドポイント	区分
1	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	予後因子	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
レビュー研究の6項目	主な結果	51%の症例は転移が生じる前に原発巣の再発があった。 30%の症例は原発巣は制御されていた。 31 例の治癒した症例のうち、13 例は手術で、2 例は放射線療法で、16 例は手術+放射線療法で治療されていた。
	結論	局所再発は領域リンパ節再発の危険因子である。
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	治療の有効性を評価できるデータではないが、リンパ節再発を生じやすい病態を把握するには多少有用か。 レベル I V

一次研究用フォーム		データ転入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Cutaneous metastatic squamous cell carcinoma to the parotid gland: analysis and outcome</b>	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-7, SCC-CQ10-3	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID	15287040	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Head Neck	
	雑誌 ID		
	巻	26	
	号	8	
	ページ	727-32	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2004 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Audet N	Princess Margaret Hospital
	その他著者 1	Palme CE	同上
	その他著者 2	Gullane PJ	同上
	その他著者 3	Gilbert RW	同上
	その他著者 4	Brown DH	同上
	その他著者 5	Irish J	同上
	その他著者 6	Neligan P	同上
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	耳下腺に浸潤した皮膚扁平上皮癌の治療成績を解析する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	Princess Margaret Hospital	
	対象者	56 例の耳下腺に浸潤した皮膚扁平上皮癌 腫瘍径：1-12 cm（平均 4 cm） 臨床的頸部リンパ節転移：6 例 臨床的神経浸潤：13 例 皮膚浸潤：13 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)	
	介入（要因曝露）	手術単独：7 例、放射線療法単独：12 例、手術＋放射線療法：37 例 手術：保存的耳下腺切除(57%)、根治的耳下腺切除(43%) 放射線療法の詳細の記載なし	
	エンドポイント (79項目)	エンドポイント	区分
	1	再発率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	無病生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	全症例の再発率：29% 再発率 手術＋放射線療法：27%、手術単独：57%、放射線療法：17% 3 年の無増悪生存率（O'Brien 分類） P1：70%、P2：83%、P3(≥6cm)：47% 顔面神経麻痺を有する症例は予後不良であった。		
結論	耳下腺に浸潤した皮膚扁平上皮癌は予後不良であり、集学的治療が必要である。径 6cm 以上の腫瘍、顔面神経麻痺を来した症例では予後不良。		

	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	耳下腺に浸潤した症例のみを集積したためもあり症例数が少なく、治療別の成績から、集学的治療が重要とは導き出しにくい。 レベル 1 V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Perineural spread of cutaneous squamous cell carcinoma via the orbit. Clinical features and outcome in 21 cases	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-9, SCC-CQ10-4	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID	9307641	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Ophthalmology	
	雑誌 ID		
	巻	104	
	号	9	
	ページ	1457-62	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1997年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	McNab AA	Royal Victorian Eye, and Ear Hospital
	その他著者 1	Francis IC	同上
	その他著者 2	Benger R	同上
	その他著者 3	Crompton JL	同上
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			
一次研究の8項目	目的	眼窩周囲に発生した皮膚扁平上皮癌のうち神経周囲浸潤をきたした症例の臨床像、治療法、治療成績を解析する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	Royal Victorian Eye, and Ear Hospital	

対象者	21例の眼窩周囲に発生した皮膚扁平上皮癌のうち神経周囲浸潤をきたした症例 部位：前頭部(11例)、眼窩(3)、頬(3)、側頭部(2)、他	
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)	
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (14)	
介入 (要因曝露)	外部照射単独：9例、根治的手術+放射線療法：3例、保存的手術+放射線療法：3例、根治的手術単独：2例、保存的手術：1例、無治療：3例	
エンドポイント (7外注)	エンドポイント	区分
1	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	予後	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	さまざまな治療が行われていたが予後は不良。 14例は9か月～5年で死亡。原因は局所または頭蓋内浸潤による。 2例のみが14-18年生存。	
結論	眼窩周囲の神経周囲浸潤を呈した症例の予後は不良。放射線療法は姑息的治療としては有効か。根治的手術は周囲正常組織もあり限られた症例に適応となる。	
備考		
レビュワーコメント	レビュワーコメント	レビュワーコメント
	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	神経周囲浸潤例が予後不良であることはわかるが、治療法に関する知見はない。 レベル I V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Lymph node metastases from cutaneous squamous cell carcinoma of the head and neck	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-12, SCC-CQ10-5	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID	16148695	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Laryngoscope	
	雑誌 ID		
	巻	115	
	号	9	
	ページ	1561-7	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2005年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Moore BA	MD アンダーソン癌センター
	その他著者 1	Weber RS	同上
	その他著者 2	Prieto V	同上
	その他著者 3	El-Naggar A	同上
	その他著者 4	Holsinger FC	同上
	その他著者 5	Zhou X	同上
	その他著者 6	Lee JJ	同上
	その他著者 7	Lippman S	同上
	その他著者 8	Clayman GL	同上
その他著者 9			
その他著者 10			

目的	皮膚原発扁平上皮癌で領域リンパ節転移を来した症例の予後を検討する。	
研究デザイン	コホート研究（前向き試験のサブセット解析）	
セッティング	MD アンダーソン癌センター	
対象者	臨床試験に登録された 210例のうち頭頸部原発例が 193例 リンパ節転移陽性：40例、陰性：153例 部位：耳下腺部(12例)、顔面(9)、頬(5)、鼻(5)、頭皮(3)、頸部(3)、 下口唇(2)、上口唇(1)	
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず (3)	
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず (14)	
介入 (要因曝露)	原発巣切除+頸部郭清+放射線療法：19例 原発巣切除+放射線療法：10例 原発巣切除のみ：4例 原発巣切除+頸部郭清：3例 放射線療法単独：2例	
エンドポイント (7外注)	エンドポイント	区分
1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
3	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	領域リンパ節転移は予後（不良）に強く相関していた。 尿管侵襲、低分化型、皮下組織への浸潤、周囲神経への浸潤、大きな腫瘍は予後不良。 手術+放射線療法は領域リンパ節の制御は95%と良好であるが、局所および遠隔転移が多い。 上記のような予後不良因子を有する症例では手術+放射線療法が必要であるが、さらなる成績の向上のためには新たなアプローチが必要。	
結論		

	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	レベル I V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Regional lymph node metastasis from cutaneous squamous cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での日次名称	SCC-CQ10-6	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1 つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ I V ）	
	Pubmed ID	9604987	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Arch Otolaryngol Head Neck Surg	
	雑誌 ID		
	巻	124	
	号	5	
	ページ	582-7	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	1998 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Kraus DH	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center
	その他著者 1	Carew JF	同上
	その他著者 2	Harrison LB	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	皮膚原発扁平上皮癌で所属リンパ節転移を認める症例の治療成績を検討する。	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	Memorial Sloan-Kettering Cancer Center	
	対象者	皮膚原発扁平上皮癌で領域リンパ節転移を認めた 45 例 平均年齢：67 歳（37-85 歳） 原発部位：耳、耳下腺部(35%)、前頭部(26%)、鼻(17%)、その他	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)	
	介入 (要因曝露)	手術：頸部郭清術 (41 例)、耳下腺のみ摘出 (4 例) 放射線療法： 外部照射 36 例 (34-71 Gy、平均 60 Gy)、組織内照射 5 例 放射線療法施行せず 9 例	
	エンドポイント (7項目)	エンドポイント	区分
		1 局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
		2 生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
		3	1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		4	1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		5	1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		6	1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7	1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	8	1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	9	1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	10	1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	主な結果	45 例中 228 例が再発 再発部位：8 例 (局所)、11 例 (領域リンパ節)、8 例 (遠隔) 2、5 年生存率：33%、22% 頸部リンパ節の病期が最も予後に相関していた。 2 年生存率：放射線療法施行群(33%)、非施行群(34%)	
	結論	領域リンパ節転移を来している症例の予後は集学的治療を行っても不良である。術後放射線療法の意義も明らかにならなかった。	
	備考		

レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	レベル I V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Carcinoma of the skin metastatic to parotid area lymph nodes	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-10、SCC-CQ10-7	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ I V ）	
	Pubmed ID	1938361	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Head Neck	
	雑誌 ID		
	巻	13	
	号	5	
	ページ	427-33	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	1991年	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Taylor BW Jr	フロリダ大学
その他著者 1		Brant TA	同上
その他著者 2		Mendenhall NP	同上
その他著者 3		Mendenhall WM	同上
その他著者 4		Cassisi NJ	同上
その他著者 5		Stringer SP	同上
その他著者 6		Million RR	同上
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	皮膚癌（扁平上皮癌と基底細胞癌）で耳下腺領域に転移した症例の治療成績を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	フロリダ大学	
	対象者	扁平上皮癌 57 例、基底細胞癌 3 例 全例に耳下腺領域にリンパ節転移がある（原発巣の直接浸潤例なし） 原発巣は制御されている：41 例、原発巣再発：14 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)	
	介入（要因曝露）	手術単独治療 8 例、放射線療法単独 16 例、両者の併用 37 例 放射線療法：1 回線量 1.8-2 Gy 総線量：60 Gy（切除断端陰性）、66 Gy（顕微鏡的陽性）、70 Gy（腫瘍が肉眼的に残存している）	
	エンドポイント（外見）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3	疾患特異生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	4	有害事象	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	局所制御 手術単独：5/8 (63%)、放射線療法単独：6/13 (46%)、 手術+放射線療法：32/36 (89%) 手術と放射線療法で再発した症例は切除断端が陽性であるか、肉眼的に腫瘍が残存した腫瘍であった。切除断端が陰性で、顔面神経浸潤がない腫瘍は全て制御された。 手術と放射線療法を行った症例の 5 年疾患特異生存率は 75%であった。両者を併用した群で重篤な合併症はなかった。		
結論	手術+放射線療法を施行した症例の局所制御は良好であった。特に、切除断端が陰性で、顔面神経浸潤がない腫瘍は全て制御された。		

	備考	
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	線量に関する記載が考察に書かれており、読みづらい論文。患者の背景なども表になっていない。 バイアスを含んだ患者選択であり、結果の解釈は要注意。 レベル 1 V

一次研究用フォーム		データ配入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Cutaneous head and neck squamous cell carcinoma metastatic to cervical lymph nodes (nonparotid): a better outcome with surgery and adjuvant radiotherapy</b>	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ10-8	
査読情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ I V ）	
	PubMed ID	14520114	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Laryngoscope	
	雑誌 ID		
	巻	113	
	号	10	
	ページ	1827-33	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2003 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Veness MJ	Westmead Hospital
	その他著者 1	Palme CE	同上
	その他著者 2	Smith M	同上
	その他著者 3	Cakir B	同上
	その他著者 4	Morgan GJ	同上
	その他著者 5	Kalnins I	同上
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	耳下腺以外の頸部リンパ節転移を生じた皮膚扁平上皮癌の治療成績を解析する。		
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究		
	セッティング	Westmead Hospital		
	対象者	74 例の耳下腺以外の頸部リンパ節転移を生じた皮膚扁平上皮癌 部位：下口唇(38%)、耳(16)、頸部(11) 病期：59%が中～低分化型 原発巣の治療後発リンパ節転移が生じた例：84%（再発までの期間：平均 11 か月、2-37 か月） リンパ節の部位：level I(38%)、II(96%)、他(14%)		
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず* (3)		
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず* (3)		
	対象者情報 (年齢)	7.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず* (14)		
	介入 (要因曝露)	手術：13 例、手術+放射線療法：52 例、放射線療法：9 例 放射線療法：根治照射 66 Gy/33 回、術後照射 60 Gy/30 回		
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
		1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
		2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
		3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	主な結果	34% (74 例中 25 例) が再発し、うち 22 例は局所領域再発であった。初期治療から再発までは平均 5.2 か月であった (2-34.3 か月)。腫瘍径が大きい(>3 cm)、多発性リンパ節転移、被膜外進展などが予後不良因子であった。 手術+放射線療法の局所再発率は 15%であり、単独治療より良好であった。		
	結論	リンパ節転移を有する皮膚扁平上皮癌は稀ではあるが、致死性疾患である。手術+放射線療法では、他の療法に比べ局所制御は良好でありそう。		

	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	各治療群に偏りがあるが、背景因子を比較した表が掲載されており、バイアスを評価するのに有用であろう。(比較的バランスはとれている印象) レベル I V

形式：皮膚がん

レビュワー研究用フォーム		データ転入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Prognostic factors for local recurrence, metastasis, and survival rates in squamous cell carcinoma of the skin, ear, and lip. Implications for treatment modality selection	
診療が提供された情報	論文の日本語タイトル		
	が引用された引用原	1.有り 2.無し ( 1 )	
	が引用された目次名称	SCC-CQ2-5, WEB-CQ2-6, SCC-CQ 4-2, SCC-CQ 5-3, SCC-CQ10-9, WEB-CQ-10-1, SCC-CQ 11-3	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュワー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( I )	
	Pubmed ID	1607418	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	26	
	号		
	ページ	976-90	
	ISSN ナンバー	0190-9622 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原文言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	1992		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rowe, D. E.	University of Texas Health Science Center, San Antonio.
	その他著者 1	Carroll, R. J.	同
	その他著者 2	Day, C. L., Jr.	同
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	皮膚、耳、口唇の SCC の局所再発、転移、生存率に関与する因子を明らかにする。
データソース	記載なし
研究の選択	除外規準 20 例未満 初回治療と再治療を混在させて再発・転移率を算出している報告 同一の症例群を用いて別の雑誌に再投稿している報告 基底細胞癌を区別して扱っていない報告 治療法別の算出をしていない報告
データ抽出	記載なし
レビュワー研究の 6 項目	主要結果 外科切除、Mohs、放射線、電気、凍結での治療後の局所再発、転移について書かれた 71 件の報告を集め、予後に関与する因子や治療法の優劣について解析した。 局所再発 (経過観察が長くなると高くなった: 7.6%→10.5%) electrodesiccation: 1.3→3.7% 切除: 5.7→8.1% 集学的治療: 4.0→7.9% 耳原発例は再発率が高かった: 16.1→18.7% 転移 (経過観察が長いと転移率も高くなった) 日に当たる部位 (2.3→5.2%) 口唇 (7.2%→13.7%) 創部 (26.2%→37.9%) 局所再発・転移のリスク 腫瘍径 2 cm 以上、Clark レベル IV~V、低分化、耳や口唇原発、日に当たらない場所の腫瘍、既治療例、周囲神経浸潤、免疫抑制治療法別局所再発率 手術: 8.1%、放射線療法: 10%、手術+放射線療法: 7.9% Mohs 手術: 3.1% 転移を有する症例の生存率 手術+放射線療法が良かった
結論	経過観察が長くなる再発率は高くなる。 再発の危険因子は、腫瘍径 2 cm 以上、Clark レベル IV~V、低分化、耳や口唇原発、日に当たらない場所の腫瘍、既治療例、周囲神経浸潤、免疫抑制であった。 再発後には転移率が高くなるので、Mohs 手術を行うべきだ。また、再発の危険性が高い例や転移例では集学的治療が良いかもしれない。
備考	



	レビューワー氏名	山崎直也 宇原 久
レビューワーコメント	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅰ） 多数の報告例を集約して検討した報告であり、有棘細胞癌の予後因子を知る資料として価値がある。 Mohs micrographic surgery については、欧米でよく使われ、治療成績も良好であるが、一連の操作に費やす時間や人手を考えるとわが国の医療の中で普及していくのは難しいと思われる。 献密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討しておりそれに準ずるものと評価した。

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Skin cancer of the head and neck with clinical perineural invasion	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	SCC-CQ9-8, SCC-CQ10-10	
書籍情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ⅠV）	
	Pubmed ID	10758309	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	47	
	号	1	
	ページ	89-93	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2000 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	McCord MW	フロリダ大学
	その他著者 1	Mendenhall WM	同上
	その他著者 2	Parsons JT	同上
	その他著者 3	Amdur RJ	同上
	その他著者 4	Stringer SP	同上
	その他著者 5	Cassisi NJ	同上
	その他著者 6	Million RR	同上
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	頭頸部原発の神経浸潤の症状を呈する皮膚癌における治療成績を解析する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	フロリダ大学	
	対象者	頭頸部原発の神経浸潤の症状を呈する皮膚癌 62 例 上顎神経(27 例)、顔面神経 (22)、その他 (19) 原発部位：頰部(18 例)、口唇(12)、頭皮(9)、耳周囲(6)、その他 T 病期：全例 T4 N 病期：N0(45 例)、N1(4)、N2(3) 初回治療例 21 例、再発症例 42 例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)	
	介入 (要因曝露)	初回治療例 21 例 放射線療法単独：12 例、手術+術後放射線療法：9 例 再発症例 41 例 放射線療法単独：18 例、手術+術後放射線療法：21 例、術前放射線療法+手術：2 例 照射法：外照射単独：23 例、外照射+組織内照射：4 例、組織内照射単独：3 例 1 日 1 回照射：46 例 1 回線量 1.86 Gy、総線量 33.3-79.5 Gy (平均 67.58 Gy) 1 日 2 回照射：13 例 1 回線量 1.14 Gy、総線量 69.6-79.2 Gy (平均 74.4 Gy)	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
		1	局所制御率
	2	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3	領域リンパ節再発	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	4	遠隔転移	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	5	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	6	有害事象	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )

	主な結果	局所再発率：45%（局所のみ：39%） 局所再発に与える予後因子：年齢、再発例、臨床的神経浸潤の兆候、治療法（手術+照射 vs. 照射単独） 領域リンパ節再発：11% 遠隔再発：1例のみ（局所再発も伴っていた） 10年生存率：31%、10年疾患特異生存率：46% 有害事象：11例で重篤な有害事象あり（骨壊死、脳障害、穿孔）
	結論	神経症状を呈する多くの症例で、不完全切除に終わった。約半数の症例で根治的放射線療法単独または、手術との併用により治癒させることができた。年齢、再発例、臨床的神経浸潤の兆候は予後に関与していた。
	備考	術前照射は2例のみ。
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	組織内照射を併用した症例が多く見られるため有害事象がやや多い印象。 レベル IV

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Adjuvant radiotherapy after excision of cutaneous squamous cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	SCC-CQ10-11	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（V）	
	Pubmed ID	8157790	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	30	
	号	4	
	ページ	633-6	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	1994年	
著者情報	氏名		
	所属機関		
	筆頭著者	Geohas J	Northwest 大学
	その他著者 1	Reholt NS	同上
	その他著者 2	Robinson JK	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	皮膚原発扁平上皮癌の切除後の放射線療法の意義を検討する。	
	研究デザイン	症例報告	
	セッティング	Northwest 大学	
	対象者	72歳男性 前胸部に径4cmの腫瘍と1.5cmの腫瘍 表在リンパ節の腫大なし	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (1)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (5)	
	介入（要因曝露）	Mohs 手術+術後放射線療法 50 Gy/25 回	
	エンドポイント（7外）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	Mohs 手術後の腫瘍の進展度の評価から再発の可能性が高いと考えられ術後照射を施行し、1年再発なし。		
結論	再発の危険性の高い症例では術後放射線療法を考慮すべきである。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人	
	レビュワーコメント	1例報告で術後放射線療法の意義を検討するのは無理がある。 レベル V	

形 式：皮膚がん

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Follow-up and prevention. Squamous cell carcinoma. In :Miller SJ, Maloney ME, Eds, Blackwell Science, Inc. Cutaneous Oncology: Pathophysiology, Diagnosis, and Management.	
	論文の日本語タイトル		
診療が「診療情報」	「診療情報」での引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	「診療情報」上の目次名称	SCC-CQ11-1, WEB-CQ11-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ VI ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名		
	雑誌 ID		
	巻		
	号		
	ページ	565-570	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原文言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	1998:		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Shin DM,	Dept. of Thoracic / Head and Neck Medical Oncology, University of Texas, M.D. Anderson Cancer Center
	その他著者 1	Maloney ME,	Pennsylvania State University College of Medicine
	その他著者 2	Lippman SM,	Dept. of Thoracic / Head and Neck Medical Oncology, University of Texas, M.D. Anderson Cancer Center
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			

レビュー研究の6項目	その他著者 10	
	目的	皮膚扁平上皮癌の経過観察の仕方についてのレビュー
	データソース	不明
	研究の選択	不明
	データ抽出	不明
	主な結果	
結論	経過観察の目的は3つある。1) 原発巣切除部における再発の早期発見。2) 遠隔転移の早期発見、3) 新たな病変の早期発見である。理学的には患者の訴えを良く聞き、原発巣部を慎重に診察し、所属リンパ節領域を良く触り、最後に特に日光露出部に新生病変がないか観察する（白人：5年以内に50%に新生病変がみられる。転移の70%は2年以内に、また、そのほとんどは1年以内に起こる。経過観察推奨期間：最初の2年は3ヵ月毎、その後3年は12ヵ月毎、In situは6ヵ月毎に行う。	
備考		
レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( VI ) SCC 患者の経過観察方法について、よくまとめられている。

形 式：皮膚がん

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	最近10年間に於ける有棘細胞癌の統計的観察	
診療が「診療情報」	「診療情報」での引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	「診療情報」上の目次名称	SCC-CQ11-2	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1991082526	
	雑誌名	西日本皮膚科	
	雑誌 ID		
	巻	51	
	号	4	
	ページ	785-765	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原文言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 1 )		
発行年月	1989:		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	和田恭子	浜の町病院皮膚科
	その他著者 1	和田秀敏	九州大学医学部皮膚科
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	有棘細胞癌の統計	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	九州大学医学部皮膚科	
	対象者	昭和60年までの10年間の有棘細胞癌の症例94例	
	対象者情報(国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国別区別せず ( 1 )	
	対象者情報(性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報(年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 12 )	
	介入(要因曝露)		
	エンドポイント(アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	外来患者に閉める皮膚扁平上皮癌患者の割合	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2	年齢分布	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
3	性差	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
4	初診までの期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
5	再発までの期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
6	再発に関連する因子	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
7	生存期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	1)有棘細胞癌の外来受診者総数に対する頻度は0.41%であり、男女比は1.41:1と男に多かった。2)年齢層別では50歳代にピークを形成していた。3)初診から来院までの期間は2年以内が77.7%であり比較的早期に受診する傾向がみられた。4)前駆病変が明らかにされた症例は65例で熱傷や外傷を起因とした瘰癧窩が多かった。5)部位別頻度では顔面および下肢が多かった。6)再発率は25.5% (24/94)であり、再発までの期間は1年未満が最も多く、平均2年2ヵ月であった (1年未満:41.6%では2年以内:58.3%と2年以内に半数以上が再発するが、4年目以後も29.9%の再発あり)。再発率の高い前駆疾患として放射線皮膚炎、色素性乾皮症、慢性円板状エリテマトーデスがあげられた。腫瘍の大きさと再発率には相関がなく、病理組織型では分化型に比べ未分化型の再発率が高かった。7)腫瘍死例は9例であった。T1N0M0の治癒率は100%であった。TNM分類で病期が進行するほど、組織型で分化度が低いほど、予後が悪かった。		

	結論	従来、熱傷痕瘻は予後不良とされてきたが、今回の研究では予後との関連は認められなかった。
	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	宇原 久
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅳ） 再発症例 24 例中 13 例は慢性放射線皮膚炎、瘻瘻、色素性乾皮症などの SCC を発生しやすい母地を持つ疾患であり、再発ではなく新たな病巣の出現であった可能性が否定できない。因みに老人性角化症と発生母地なし、は 6 例のみである。欧米の報告に比べて、比較的長期間にわたって再発していることや、再発率が高いのは、上記のような理由によるかもしれない。ただし、本邦人症例について、再発までの期間を調査した数少ない貴重なデータである。

形式：皮膚がん

レビュワー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Prognostic factors for local recurrence, metastasis, and survival rates in squamous cell carcinoma of the skin, ear, and lip. Implications for treatment modality selection	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ2-5、WEB-CQ2-6、SCC-CQ 4-2、SCC-CQ 5-3、SCC-CQ 11-3	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュワー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( I )	
	Pubmed ID	1607418	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	26	
	号		
	ページ	976-90	
	ISSN ナンバー	0190-9622 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.看護 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1992	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rowe, D. E.	University of Texas Health Science Center, San Antonio.
	その他著者 1	Carroll, R. J.	同
	その他著者 2	Day, C. L., Jr.	同
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	皮膚、耳、口唇の SCC の局所再発、転移、生存率に関する因子を明らかにする。
データソース	記載なし
研究の選択	除外規準 20 例未満 初回治療と再治療を混在させて再発・転移率を算出している報告 同一の症例群を用いて別の雑誌に再投稿している報告 基底細胞癌を区別して扱っていない報告 治療法別の算出をしていない報告
データ抽出	記載なし
レビュワー研究の 6 項目	主要結果 外科切除、Mohs、放射線、電気、凍結での治療後の局所再発、転移について書かれた 71 件の報告を集め、予後に関わる因子や治療法の優劣について解析した。 局所再発（経過観察が長くなるほど高くなった：7.6%→10.5%） electrodesiccation：1.3→3.7% 切除：5.7→8.1% 集学的治療：4.0→7.9% 耳原発例は再発率が高かった：16.1→18.7% 転移（経過観察が長いと転移率も高くなった） 日に当たる部位（2.3%→5.2%） 口唇（7.2%→13.7%） 創部（26.2%→37.9%） 局所再発・転移のリスク 腫瘍径 2 cm 以上、Clark レベル IV～V、低分化、耳や口唇原発、日に当たらない場所の腫瘍、既治療例、周囲神経浸潤、免疫抑制治療法別局所再発率 手術：8.1%、放射線療法：10%、手術＋放射線療法：7.9% Mohs 手術：3.1% 転移を有する症例の生存率 手術＋放射線療法が良かった
結論	経過観察が長くなるほど再発率は高くなる。 再発の危険因子は、腫瘍径 2 cm 以上、Clark レベル IV～V、低分化、耳や口唇原発、日に当たらない場所の腫瘍、既治療例、周囲神経浸潤、免疫抑制であった。 再発には転移率が高くなるので、Mohs 手術を行うべきだ。また、再発の危険性が高い例や転移例では集学的治療が良いかもしれない。
備考	

レビュワーコメント	レビュワー氏名	山崎直也 宇原 久
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅰ） 多数の報告例を集約して検討した報告であり、有棘細胞癌の予後因子を知る資料として価値がある。 Mohs micrographic surgery については、欧米でよく使われ、治療成績も良好であるが、一連の操作に費やす時間や人手を考えるとわが国の医療の中で普及していくのは難しいと思われる。 厳密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討しておりそれに準ずるものと評価した。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	皮膚有棘細胞癌 93 例の組織学的検討	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ11-4	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1 つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( IV )	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1990004834	
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID	(0915-3535)	
	巻	2	
	号		
	ページ	152-155	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 1 )	
	発行年月	1987	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	小林まさ子,	千葉大学医学部皮膚科
	その他著者 1	長谷川隆,	千葉大学医学部皮膚科
	その他著者 2	藤田優,	千葉大学医学部皮膚科
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	リンパ節転移のリスク因子の検討		
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究		
	セッティング	千葉大学病院		
	対象者	外科的治療を行った皮膚原発有棘細胞癌 93 例		
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず ( 1 )		
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )		
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 22 )		
	介入 (要因曝露)	組織所見 (深達度、分化度など)		
	エンドポイント (7916)	エンドポイント	区分	
	1	リンパ節転移	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )		
主な結果	原病死は11例にみられ、そのうち5例は原発巣手術後のリンパ節転移によるものであった。原発巣の悪性度の組織学的指標として、腫瘍の深達度、腫瘍細胞の分化度、異型度、浸潤度、リンパ管内侵襲度の5項目について、リンパ節転移との関係を検討したところ、深達度と浸潤度がリンパ節転移を予測するのにもっとも有用であった。			
結論	深達度と浸潤度がリンパ節転移を予測するのにもっとも有用であった。			
備考				
レビュワーコメント	レビュワー氏名	宇原 久		
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( IV ) 従来から予測されていた多くのリスク因子の中で、浸潤パターンと深さが最も重要であることを本邦人について初めて明らかにした貴重な報告である。		

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	有棘細胞癌におけるリンパ節転移のリスク因子. . .	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ11-5	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( IV )	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	2005155023	
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	19	
	号		
	ページ	359-363	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 1 )		
発行年月	2004		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	竹之内辰也	新潟がんセンター
	その他著者 1	勝海 薫	同
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	リンパ節転移のリスク因子を調べる	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	新潟がんセンター	
	対象者	新潟がんセンターで 1993-2002 年までの間に治療を受けた SCC 118 例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず ( 1 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 15 )	
	介入 (要因曝露)	年齢、性、部位、腫瘍径、腫瘍の厚さ、浸潤レベル、浸潤様式	
	アウトカム (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	リンパ節転移	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原 久	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( IV ) リンパ節転移のリスク因子として多くの因子が報告されてきているが、多変量解析を行った研究はほとんどない。貴重なデータである。	
主な結果	結論	年齢、性別、発生部位、腫瘍径、Tumor thickness、Level、浸潤様式（胃癌に準ずる）の計 7 因子について多変量解析を行った。有意な相対リスクを示したのは、手足の原発（頸部に対する OR : 8.3）、浸潤様式 IFN $\gamma$ （浸潤性増殖、周囲との境界不明瞭）が IFN $\alpha$ （膨脹性増殖で周囲と一線を画す）と $\beta$ ( $\alpha$ と $\gamma$ の中間) に対して OR:5.9 であった。	
	備考	手足原発、IFN $\gamma$ （浸潤性増殖、周囲との境界不明瞭）を示す SCC はリンパ節転移のハイリスク症例として扱うべきである。	

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Multiprofessional guidelines for the management of the patient with primary cutaneous squamous cell carcinoma.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ2-1、WEB-CQ2-1、SCC-CQ 3-2、SCC-CQ 11-6、	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( I )	
	Pubmed ID	11841362	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	146	
	号	1	
	ページ	18-25	
	ISSN ナンバー	0007-1226 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 3 )		
発行年月	2002		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Motley, R.	Department of Dermatology, University Hospital of Wales, Cardiff, UK.
	その他著者 1	Kersey, P.	同上
	その他著者 2	Lawrence, C.	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の 6 項目	目的	EBM に基づいた皮膚原発 SCC の診療ガイドラインを提供すること。	
	データソース	Brodland の論文など（切除マージン）	
	研究の選択	記載なし	
	データ抽出	記載なし	
	主な結果	定義、疫学、診断方法、予後、転移に関する因子（部位、露出部位、非露出部位、耳、口唇、放射線照射部位や熱傷部位にできた腫瘍、2 cm 以上のサイズ、4 mm 以上の厚さ、クラークレベル IV、未分化、神経浸潤、宿主の免疫不全、再発傾向で転移しやすい）、Mohs 法、切除マージン（高分化で 2 cm 以下、境界が明瞭で悪い予後因子を持たない場合は 4 mm、悪い予後因子を持つ場合は 6 mm を推奨している）、凍結療法、放射線療法、予防的リンパ節摘出、経過観察法についてレビューしている。	
	結論		
備考			
レビューワーコメント	レビューワー氏名	梅林芳弘 宇原 久	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( I ) 進行期病変も対象に含めた皮膚 SCC の診療ガイドラインは少ないため、貴重な指針である。	

形式: 皮膚がん

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Treatment recommendations in patients diagnosed with high-risk cutaneous squamous cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ11-7	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( I )	
	Pubmed ID	16174174	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Australas Radiol	
	雑誌 ID		
	巻	49	
	号	5	
	ページ	365-76	
	ISSN ナンバー	0004-8461 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	2005		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Veness, M. J.	Department of Radiation Oncology, Sydney University, Westmead Hospital, Westmead NSW 2145, Australia.
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	高リスクを持つ SCC の治療方針を提供する
	データソース	不明
	研究の選択	同上
	データ抽出	同上
	主な結果	1: 転移のリスクの高い原発巣をもつ症例における所属リンパ節に対する予防的治療 2: 転移を来した所属リンパ節に対する治療 3: 不完全切除の原発巣に対する治療 4: 神経浸潤を起している原発巣に対する治療 5: 免疫不全患者の SCC に対する治療 上記 1-5 について、検証、治療についてレビューし、それぞれ推奨コメントをつけている。
	結論	SCC を扱う医師は、放射線治療の有効性について知るべきである。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( I ) これまでのエビデンスを紹介し、放射線治療を併用した治療法について推奨コメントをつけている。やや、放射線治療の有効性を強調しすぎる感じもあるが、よく書かれたレビューである。 厳密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討されており、それに準ずるものと評価した。

形式: 皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Lymph node metastases from cutaneous squamous cell carcinoma of the head and neck	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ11-8	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究による) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズによる) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( IV )	
	Pubmed ID	16148695	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Laryngoscope	
	雑誌 ID		
	巻	115	
	号	9	
	ページ	1561-7	
	ISSN ナンバー	0023-852X (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月			
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Moore, B. A.	Department of Head and Neck Surgery, University of Texas MD Anderson Cancer Center.
	その他著者 1	Weber, R. S.	
	その他著者 2	Prieto, V.	
	その他著者 3	El-Naggar, A.	
	その他著者 4	Holsinger, F. C.	
	その他著者 5	Zhou, X.	
	その他著者 6	Lee, J. J.	
	その他著者 7	Lippman, S.	
	その他著者 8	Clayman, G. L.	
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	リンパ節転移のリスク因子、リンパ節転移が生存や再発に与える影響を調べる	
	研究デザイン	コホート研究	
	セッティング	M.D. Anderson がんセンター	
	対象者	1996-2001 に臨床試験に登録された 210 例のうち頭頸部原発例が 193 例 リンパ節転移陽性: 40 例、陰性: 153 例 部位: 耳下腺部(12 例)、顔面(9)、頬(5)、鼻(5)、頭皮(3)、頸部(3)、下口唇(2)、上口唇(1)	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国別別せず ( 3 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児 8.青年 9.乳幼児・小児・青年・中年 10.乳幼児・小児・青年・中年・老人 11.小児・青年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別別せず ( 14 )	
	介入 (要因曝露)	リンパ節転移	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
		1	生存期間
	2	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 ( 3 )
	3	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 ( 3 )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	主な結果	再発と生存をエンドポイントに前向き調査を行った。20.7%にリンパ節転移が出現した。リンパ節転移は統計学的に、再発 (P = .002) 組織学的所見 (脈管浸潤 (P < .0001), 神経浸潤 (P = .010), 低分化 (P = .001), 皮下脂肪組織への浸潤 (P = .0001), 神経浸潤 (P = .005), サイズ (P = .0007) と関連していた。手術療法と放射線療法の併用患者は 95% がコントロールできた。Kaplan-Meier 生存分析では、リンパ節転移症例は overall survival (P = .005), disease-free survival (P = .015), disease-specific survival (P = .0002), time to recurrence (P = .012) を悪化させた。	
	結論	本研究ではリンパ節転移は稀ではなかった。上記のような予後不良因子を有する症例では手術+放射線療法が必要であろうが、さらなる成績の向上のためには新たなアプローチが必要。	

	備考	
レビューコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ IV ） リンパ節転移に対する診断および治療について注意を促す論文である。



BCC CQ1 (1)

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚癌 (基底細胞癌、有棘細胞癌)	
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Daily sunscreen application and betacarotene supplementation in prevention of basal-cell and squamous-cell carcinomas of the skin: a randomized controlled trial</b>	
論文の日本語タイトル	論文の日本語タイトル	サンスクリーン使用とベータカロチン摂取による基底細胞癌、有棘細胞癌の発生予防のランダム化比較試験	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	BCCCQ1-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( II )	
	Pubmed ID	10475183	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Lancet	
	雑誌 ID		
	巻	354	
	号		
	ページ	723-729	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	1999		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
		Green A	Queensland Institute of Medical Research
	その他著者 1	Williams G	
	その他著者 2	Neale R	
	その他著者 3	Hart V	
	その他著者 4	Leslie D	
	その他著者 5	Parsons P	
	その他著者 6	Marks GC	
その他著者 7	Gaffney P		

		その他著者 8	Battistutta D
		その他著者 9	Frost C
		その他著者 10	Lang C
		その他著者 11	Russell A
一次研究の8項目	目的	サンスクリーン使用とベータカロチン摂取による皮膚癌の発生予防の可否を検証する	
	研究デザイン	ランダム化比較試験	
	セッティング	オーストラリアの複数施設	
	対象者	健康人 1621 名	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 13 )	
	介入 (要因曝露)	1) サンスクリーン (SPF15) を連日使用+ベータカロチン 30mg/日内服 2) サンスクリーン (SPF15) を連日使用+プラセボ内服 3) ベータカロチン 30mg/日内服 4) プラセボ内服 の4群にランダム化割り付け。	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	介入開始後4.5年以内の基底細胞癌もしくは有棘細胞癌の新規発生	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	主な結果	フォロー期間中のサンスクリーン使用群と非使用群における基底細胞癌の罹患率はそれぞれ 10 万人対 2588 vs 2509、オッズ比 1.03 [95%CI 0.73-2.46] で有意差は認めなかった。有棘細胞癌についてもサンスクリーンの使用の有無での罹患率の有意差なし (10 万人対 876 vs 996、オッズ比 0.88[95%CI 0.50-1.56])。ベータカロチン投与群とプラセボ群の比較では、基底細胞癌 (10 万人対 3954 vs 3806、オッズ比 1.04[95%CI 0.73-1.27])、有棘細胞癌 (10 万人対 1508 vs 1146、オッズ比 1.35 [95%CI 0.84-2.19]) のいずれも罹患率の有意差は認めなかった。発生例数ではなく病変数での罹患率で見ると、基底細胞癌ではサンスクリーン使用、ベータカロチン摂取いずれにおいても有意差は認めなかったが、有棘細胞癌だけがサンスクリーン使用群において非使用群に比べ有意に罹患率が低かった (10 万人対 1115 vs 1832、オッズ比 0.61 [95%CI 0.46-0.81])。	

	結論	今回の中程度期間の研究では、サンスクリーンの連日使用およびベータカロチンの内服による有害作用はみられなかったが、基底細胞癌の発生予防効果は得られなかった。
	備考	Intention to treat analysis
レビューコメント	レビューワー氏名	竹之内辰也
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 (II) Nambour は Queensland 州の首都 Brisbane より 100km 北に位置する都市であり、オーストラリアの中でも最も皮膚癌罹患率の高い地域の一つである。Nambour に居住する健康人を対象とした大規模なランダム化比較試験であるが、5 年未満という短い期間でサンスクリーンの使用と基底細胞癌発生予防の関連について結論を出すのは難しい。Nambour における基底細胞癌の罹患率は人口 10 万対数千という高いレベルであるため、この介入研究の結果をそのまま日本人に当てはめるのは困難である。

BCC CQ1 (2)

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
タイプ			
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Repeated occurrence of basal cell carcinoma of the skin and multifailure survival analysis: Followup data from the Nambour Skin Cancer Prevention Trial</b>	
	論文の日本語タイトル	基底細胞癌の多発と multifailure survival analysis : Nambour Skin Cancer Prevention Trial からのフォローアップデータ	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	BCCCQ1-2	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( IV )	
	Pubmed ID	15800267	
	医中誌 ID		
	雑誌名	American Journal of Epidemiology	
	雑誌 ID		
	巻	161	
	号	8	
	ページ	748-754	
	ISSN ナンバー	pISSN: 0002-9262 eISSN: 1476-6256	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	2005		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Pandeya N	Queensland Institute of Medical Research
	その他著者 1	Purdie DM	
	その他著者 2	Green A	
	その他著者 3	Williams G	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
その他著者 6			

一次研究の8項目	目的	サンスクリーンの使用による基底細胞癌の多発の予防効果を検証する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	オーストラリアの複数施設	
	対象者	健康人 1821 名	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず ( 3 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別別せず ( 13 )	
	介入 (要因曝露)	サンスクリーン連日使用と未使用群にランダム化割り付け	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	基底細胞癌の初回発生	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2	基底細胞癌の二次発生	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
主な結果	Multifailure survival analysis として、Andersen-Gill、Wei-Lin-Weissfeld、Prentice-Williams-Peterson の 3 種類のモデルを用いた。サンスクリーンの使用は基底細胞癌の初回発生までの期間には有意な影響を与えなかった (ハザード比 1.04 [0.79-1.45])。初回発生以降の二次発生については、Andersen-Gill モデルではサンスクリーン使用群の方が非使用群に比べて低い発生リスクを示したが、統計学的に有意ではなかった (ハザード比 0.82 [0.59-1.15])。同様に、Wei-Lin-Weissfeld marginal-hazards と Prentice-Williams-Peterson gap-time models でも有意差には至らないものの、サンスクリーン使用群において基底細胞癌の二次発生リスクは減少傾向を示した。		
	有意差は得られていないが、サンスクリーンの使用は基底細胞癌の二次発生の予防に寄与している可能性が示された。また、繰り返し起こるイベントに影響する危険因子の解析には multievent analysis が有用であることが示された。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	竹之内辰也	
	コメント	エビデンスのレベル分類 (IV) オーストラリアの皮膚癌多発都市の一つである Nambour で行われた大規模な介入研究である Nambour Skin Cancer Prevention Trial の結果について、さらに詳細に解析した報告である。1999 年に Lancet に報告された trial の内容は、4.5 年の観察期間の範囲ではサンスクリーン投与とベータカロチン内服のいずれも、非投与群と比較して基底細胞癌の罹患率に有意差は認めないとするものであった。一次アウトカムは初回発生であるが、期間中の基底細胞癌発生数をアウトカムとしてもやはり有意差は得られていない。しかし、この trial において基底細胞癌が発生した住民のうち半数以上は新たな基底細胞癌が二次発生しており、それらを含めた解析法として著者らは 3 種の multifailure survival analysis を用いている。	

BCC CQ1 (3)

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚癌	
タイプ			
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	大分県における皮膚癌検診	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	BCCCQ1-3	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( V )	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	2004052713	
	雑誌名	日本皮膚科学会雑誌	
	雑誌 ID		
	巻	113	
	号	10	
	ページ	1553-1560	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 1 )		
発行年月	2003		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	安西 三郎	大分医科大学皮膚科
	その他著者 1	鎌谷博美	
	その他著者 2	寺師浩人	
	その他著者 3	荒川晶子	
	その他著者 4	阿南 隆	
	その他著者 5	松尾由紀	
	その他著者 6	竹内善治	
	その他著者 7	渡野 豊	
	その他著者 8	片桐一元	
	その他著者 9	高安 進	
その他著者 10	藤原作平		

一次研究の8項目	目的	大分県の 2ヶ所における皮膚癌の発生状況を調査し、紫外線曝露との因果関係を推測する	
	研究デザイン	横断研究	
	セッティング	大学病院	
	対象者	大分県姫島村、直入町の住民	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず ( 1 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女別別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別別せず ( 14 )	
	介入 (要因曝露)	サンスクリーンの使用と未使用群にランダム化割り付け	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	皮膚癌の有病率、罹患率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	姫島村での基底細胞癌の有病率は人口 10 万対 536 (2000 年)、48 (2001 年)、直入町では 29 (2000 年)、30 (2001 年)。2001 年度データより算出した年齢調整罹患率は姫島村で人口 10 万対 95、直入町で 38 であった。		
	主産業が漁業である姫島村と農業の直入町で基底細胞癌の有病率、罹患率に差がみられたことは、紫外線曝露との関連があるかもしれない。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	竹之内辰也	
	コメント	エビデンスのレベル分類 (V) 基底細胞癌有病者の実数自体が少ないため精度は高くないが、本邦において皮膚癌の罹患率として示されているデータはほとんど存在しないので、貴重な報告である。	

BCC CQ1 (4)

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Skin cancer screening in Okinawa, Japan</b>	
	論文の日本語タイトル	沖縄における皮膚癌検診	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	BCCQ1-4	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ V ）	
	Pubmed ID	10215187	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of Dermatological Science	
	雑誌 ID		
	巻	19	
	号		
	ページ	161-165	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1999	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Nagano T	神戸大学皮膚科
	その他著者 1	Ueda M	
	その他著者 2	Suzuki T	
	その他著者 3	Naruse K	
	その他著者 4	Nakamura T	
	その他著者 5	Taguchi M	
	その他著者 6	Araki K	
	その他著者 7	Nagagawa K	
	その他著者 8	Nagai H	
	その他著者 9	Hayashi K	
	その他著者 10	Watanabe S	
その他著者 11	Ichihashi M		

一次研究の 8項目	目的	沖縄県伊江島における皮膚癌の発生状況を調査し、紫外線との因果関係を推定する		
	研究デザイン	横断研究		
	セッティング	大学病院		
	対象者	沖縄県伊江島の住民		
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず ( 1 )		
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女別別せず ( 3 )		
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別別せず ( 15 )		
	介入（要因曝露）			
	エンドポイント（アウトカム）	エンドポイント	区分	
		1	皮膚癌の有病率、罹患率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
		2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	1993～1996の3年間の皮膚癌検診で基底細胞癌の診断は9名、1993年検診時点の有病率は人口10万対123.6、年齢調整罹患率は26.1。			
結論	基底細胞癌に関しては発生数が少ないため、紫外線との因果関係を示唆するまでには至らず。			
備考				
レビューワー コメント	レビューワー氏名	竹之内辰也		
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 (V) 日本において皮膚癌の記述疫学データは乏しいので、対象が一地区であっても貴重な報告である。		

BCC CQ1 (5)

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Nonmelanoma skin cancer in Japanese ethnic Hawaiians in Kauai, Hawaii: An incidence report</b>	
	論文の日本語タイトル	ハワイのカウアイ島における日系人の非黒色種皮膚癌の罹患状況	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	BCCQ1-5	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ V ）	
	Pubmed ID	7657865	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Journal of the American Academy of Dermatology	
	雑誌 ID		
	巻	33	
	号	3	
	ページ	422-426	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1995	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Cuang Tsu-Yi	Department of Dermatology, Wright State University
	その他著者 1	Reizner G	
	その他著者 2	Elpern D	
	その他著者 3	Stone J	
	その他著者 4	Farmer E	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
その他著者 7			

一次研究の 8項目	目的	カウアイ島の日系人の非黒色種皮膚癌の罹患状況を調査し、紫外線曝露との因果関係を推察する		
	研究デザイン	横断研究		
	セッティング	大学病院		
	対象者	ハワイカウアイ島に在住の日本人・日系人		
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず ( 1 )		
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女別別せず ( 3 )		
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別別せず ( 22 )		
	介入（要因曝露）			
	エンドポイント（アウトカム）	エンドポイント	区分	
		1	基底細胞癌、有棘細胞癌、ボーエン病の罹患率	1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
		3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	1983～1987年の調査で、基底細胞癌の年齢調整罹患率は人口10万対30。			
結論	過去の日本での基底細胞癌の疫学データと比べて罹患率が約10倍であり、紫外線との因果関係が強く示唆される。			
備考				
レビューワー コメント	レビューワー氏名	竹之内辰也		
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 (V) 比較対象としている過去の本邦報告は病院受診者を対象として調査したものであり、分析疫学データとは言い難いために罹患率としての比較は困難。		

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Tumors arising in nevus sebaceous: A study of 596 cases	
	論文の日本語タイトル		
文献引用情報	引用時の引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	引用上での日次名称	BCCCQ2-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ V ）	
	Pubmed ID	10642683	
	医中誌 ID		
	雑誌名	JAm Acad Dermatol.	
	雑誌 ID		
	巻	42	
	号	2	
	ページ	263・8	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	2000	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Cribier B	Strasbourg 大学
	その他著者 1	Scrivener Y	同上
	その他著者 2	Grosshans E	同上
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	脂腺母斑上に悪性腫瘍は生じるか	
	研究デザイン	症例集積研究	
	セッティング	Strasbourg 大学	
	対象者	596 例（男性 306 例、女性 290 例、平均年齢 25.4 歳（生後 1 月から 87 歳）の脂腺母斑	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別せず ( 3 )	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女別せず ( 3 )	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢別せず ( 22 )	
	介入（要因曝露）		
	エンドポイント（アウトカム）	エンドポイント	区分
	1	脂腺母斑上に悪性腫瘍は生じるか	1.主要 2.副次 3.その他 (1)
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
	主な結果	596 例（男性 306 例、女性 290 例、平均年齢 25.4 歳（生後 1 月から 87 歳）の脂腺母斑を病理組織学的に検討した（232 例は 16 歳以下で切除）。基底細胞癌は 5 例（0.8%、平均 39.3 歳）に対し、良性腫瘍は 81 例（13.6%、平均 46.3 歳）であった。良性腫瘍では Syringocystadenoma papilliferum（計 30 例、男性 15 例、女性 15 例）trichoblastoma（計 28 例、男性 7 例、女性 21 例）が多かった。	
	結論	脂腺母斑上に悪性腫瘍が生じると一般に考えられているが、その頻度は極めて低いものと推定される。また、小児においては悪性腫瘍発生はなく、良性腫瘍発生も 1.7%であった。小児期の予防的切除に根拠はない。	
	備考		

レビューコメント	レビューワー氏名	師井 洋一
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ V ） 症例集積研究であり、エビデンスレベルは低いものの、多数例を検討した貴重なデータである。脂腺母斑に悪性腫瘍を生じる確率は極めてまれと考えられる。